

# Digesta 中ニ於ケル emblemata Triboniani

春木一郎



ユスチニアヌス帝八紀元後五百三十年十二月十五日ノ勅令 (Deo auctore ナル語ヲ以テ始マルヲ以テ時ノ司法大臣 (quaestor sacri palatii) Tribonianus ニ命シ法学者ノ著書ヲ抄録シテ法学教習ノ目的ヲ兼ネタル法典ヲ彙纂セシム Tribonianus 八勅命ヲ奉シテ四名ノ法学者十二名ノ實際家ヲ委員ト為シテ Quintus Mucius Scaevola (紀元前八十一年ニ没ス) 以降三十九大家 (或ハ四十家トモ云フ Kipp, Geschichte der Quellen. 2 Auf. 1903, S. 141) ノ大凡二千巻ノ法律書ヲ参考シテ帝ノ命ニ從フテ五十巻ヨリ成ル Digesta 又ハ Pandectae ト題スル法典ヲ編纂セリ此法典八五百三十三年十二月十五日ヲ以テ公布サレ同年同月三十日ヨリ施行サレタリ

1  
(1491)

Digesta ノ編纂委員ハ法学者ノ著書ヲ抄録スルニ当リテ必要ト認メタル挿入変更削除ヲ為スノ権限ヲ与ヘラレタリ (C. 1, 17, 2, 10) 此権限ニ依リテ Tribonianus 等ハ法学者ノ著書ヨリ採録シタル文章中ニ加ヘタル挿入又ハ変更ヲ近世人ハ emblemata Triboniani (ἐμβλήματα 附加) 又ハ interpolationes ト称ス

emblemata Triboniani ノ意義ヲ明カニスルニハ是ニ似テ非ナル挿入変更ヲ除外スルコトヲ要ス

(一) 編纂委員カ閲読ノ用ニ供シタル写本中ニ於ケル錯誤ニシテ委員ノ見落ニ因リ訂正ヲ經サリシモノ

此ノ如キ錯誤ハ写本中ニ慣用セラルル略字 (Sigla) ニ起因スルコト往々ナリ今其一例ヲ挙ケン D. 1, 2, 1 ニ Gaius ノ十二表法註解第一巻ヨリ採用

## サレタル法文中ニ

Facturus legum vetustarum interpretationem, necessario prius ab urbis initiiis repetendum existimavi

<sup>2</sup>  
(1492)

云々トアリ此法文中 repetendum ノ主格ヲ見出タス能ハス通常 repetendum ノ後ニ esse ヲ加ヘテ意義ヲ求ム然レトモ populi Romani ius ナル三字カ p R ius ト略書セラレタルヲ転写ノ際写生字力氣付カスシテ之ヲ連続シ prius ト書シタルコトヲ委員モ又氣付カスシテ法文ヲ立案シタルモノナラント想像シテ前掲法文中ノ prius ヲ populi Romani ius ト読ムトキハ語格上正シキ且ツ流暢ナル羅甸文ヲ為シ大凡左ノ如ク訳出スルコトヲ得ヘシ

古法(十二表法ヲ指ス)ノ解釈ヲ為サントスルニ当リテ予ハ(Gaius)羅馬ノ原始ニ遡リテ羅馬国民ノ法(populi Romani ius)ヲ闡明スルノ必要アリト思考シタリ

Mommsen 氏ノ Digesta 校本ノ脚註ニハ prius ハ populi Romani ius ノ誤ナランカト記ス(Digesta I. p. 3, N. 1)

何レノ文詞カ誤写ニシテ委員カ之ヲ承継シタルモノナルカハ断言スル能ハス前例ノ如キモ唯有力ナル想像ニ過キスト雖モ原本トノ此ノ如キ種類ノ相違ハ多少存在スルモノナルハ数ノ免レサルトコロナリ而シテ此種ノ挿入変更ハ emblemata Triboniani ニ非ス

<sup>3</sup>  
(1493)

(二) 委員カ閲読シタル写本ノ本文中ニ混入セル註解(glossemata)

是レ亦 emblemata Triboniani ニ非ス法学者ノ著書ノ写本ヲ研究スル者カ自カラ筆ヲ採リテ簡單ノ註解ヲ書キ入レタルコトアルヘシ而シテ是ヲ手本トナス写生字力往々原文ト其註解トノ區別ヲナサス一列ニ謄写スルコトアルヘシ此ク原文文ニ註解ノ混入セル写本ヲ閲読スル際ニ委員カ甄別ヲ為サス註解ヲモ原文ノ一部トシテ採用シタルコトアルヘキハ又正当ノ想像ニシテ今日伝ハル Digesta ノ text 中其實例少ナシトセス

委員カ故意ニ原著ノ法文ニ挿入又ハ変更ヲ加フルニハ一定ノ目的ヲ有シタルヘキナリ今次ニ其目的ヲ解説セントス

(イ) 原著者時代ノ法制ノ説明ヲユスチニアヌス帝時代ノ法制ト一致セシムルノ目的

是レ emblemata Triboniani ノ目的中ノ重モナルモノニシテ現今普通ニ用ヒラルル羅馬法教科書中ニモ之ヲ説ケリ (Sohm, Inst. § 21; Czyhlarz, Inst. § 14) 此目的ヲ達センカ為メ委員ハ既ニ實用ヲ失シタル法制ヲ示メス語ニ代ユルニ同一目的ヲ有スル法制ヲ示メスノ語ヲ以テシタリ mancipatio ヲ traditio ニ fiducia ヲ pignus ニ変更シタルカ如シ然カノミナラス委員ハ此目的ヲ達センカ為メ全然新ラシキ文章ヲ挿入シタルノ例ナキニ非ス其顯著ナルモノヲ云ハハ D. 30, 1 ナリ同法文ニ曰ク

4  
(1494)

Per omnia exaequata sunt legata fideicommissis.

委員ハ此法文ノ出所ヲ Ulpianus ノ ad Edictum ノ第六十七卷ニ歸シタリ該法文中ノ per omnia ナル語ハ白銀時代ノ羅葡語ニ於テモ慣用ノ語ニ非ス (Kalb, das Juristenlatein S. 80) 此点ヨリシテ此法文カ挿入ナルノ疑ヲ起サシム翻ツテ Ulpianus ノ Regulae XXV. 1-10 ヲ檢スルニ氏ハ明ラカニ legatum ト fideicommissum ノ重モナル區別ヲ説ク之ニ拠リテ見レハ前掲ノ法文カ確カニ委員ノ挿入ニ係レルモノナルコトヲ断言スルコトヲ得ヘシ而シテ legatum ト fideicommissum 両制ノ歸一カ ユスチニアヌス帝 ノ立法ニ因ルコトハ五百二十九年ノ勅令 (C. 6, 43, 1) ニ依リテ明ラカナリ唯怪シム Lenel 氏ハ何故ニ斯ク明白ナル emblema ヲ其 Palingenesia (第二卷八百二ページ 千四百六十七号参看) 中ニ指摘セサリシカラ

(口) 従来ノ法ヲ改正スルノ目的

今此種ノ法文ノ一例ヲ挙ケン

5  
(1495)

敵ノ捕虜トナリタル者ノ妻ハ婚姻上ノ身分ヲ繼續スルモノト觀察スルコトヲ得ル所以ハ容易ニ他人ト結婚スル能ハサルノ唯一ノ理由ニ拠ル而シテ一般ノ原則トシテ (et generaliter definiendum est) 夫カ捕虜トシテ生存スルノ事實確實ナルノ間ハ其妻ハ他ノ婚姻ニ意ヲ移スノ自由ヲ有セサルモノト (nullam habere licentiam uxores eorum migrare ad aliud matrimonium) 規定セサルヘカラス但妻自身ニ於テ好ムテ離婚セラルヘキ原因ヲ生セシメタルトキハ此限ニ在ラス然レトモ之ニ反シテ夫カ敵手ニ在リテ尚生存スルヤ或ハ死亡シタリシヤカ不確定ナルトキハ婦ハ夫ノ捕虜トナリタルトキヨリ五年經過シタルニ於テハ他ノ婚姻ニ意ヲ

移スノ自由ヲ有ス (licentiam habet niulier ad alias migrare nuptias) 故ニ従前ノ婚姻ハ善意ニ解消セラレタルモノト看做サレ且何人モ其權利ノ消長ヲ受ケサルノ結果ヲ生ス夫カ羅馬ニ在リ妻カ捕虜トナリタル場合ニ於テモ亦同シ規定ヲ遵奉セサルヘカラス (D. 24, 2, 6)

右ノ法文ハ Salvius Iulianus ノ Digesta 第六十二卷ヨリ採録サレタルノ題目 (inscriptio) ヲ有ス然ルニユスチニアヌス帝ノ D. 25, 2, 45, 6 ニ Ulpianus ノ著書中ヨリ採録サレタル法文中ニ Iulianus ノ見解ヲ掲ケテ曰ク

Iulianus ノ見解ニテハ夫ノ捕虜中ニ於テモ其夫ヨリ解放サレタル婦人トノ婚姻ハ解放者ニ対スル尊敬上ヨリシテ継続ス

云々此法文ヨリシテ考フルニ Iulianus ハ一般ノ原則トシテハ夫婦ノ一方ノ捕虜トナリタル事実ニ由リ婚姻ハ当然解消ス唯解放者ト被解放者間ニ於テハ特別ノ理由ニ依リ解消セストノ意見ヲ有シタルモノト思ハル而シテ D. 49, 15, 12, 4; D. eod. 14, 1; D. eod. 25 ニ於テモ同一ノ決定ニ帰着スヘキ Tryphonius, Pomponius, Marcianus 等ノ法文ヲ掲ク

D. 24, 2, 6 ノ主意ハ Iulianus ノ見解ヲ引用セル他ノ法文及ヒ其他ノ学者ノ著書中ヨリ採録サレタル法文ノ帰着スル趣旨ニ反スルノミナラス法文中ニ於テ已ニ挿入タルノ疑ヲ存スル文詞ヲ含ム licentiam habere 及ヒ ad alias nuptias migrare ナル句ハ Iulianus 時代ニ於ケル慣用ノモノニ非ス加フルニ et generaliter definiendum est ト云フ文詞モ亦 Tribonianus 等ノ特徴ヲ示メス

要スルニ D. 24, 2, 6 ハ委員カ婚姻ハ神聖ニシテ解消スヘキモノニ非ストノ耶穌教理ノ感化ヲ蒙リ Iulianus 時代ノ規定ヲ変更スルノ目的ヲ以テ殊更ニ氏ノ口ニ託シテ et generaliter 以下ノ法文ヲ委員カ挿入シタルニ外ナラス容易ニ emblemata ナリト断定セサリシ Bynkershoek 氏ト雖此法文カ然ルナルコトヲ承認シタリト云ヒ又 Lenel 氏ハ例ノ Palingenesia I, p. 470, N. 758 ノ脚註ニ於テ et generaliter 以下ハ Tribonianus ノ作ニ係ルコトヲ明言ス (Gradenwitz, Interpolationen in den Pandekten 1887, S. 10–12)

(八) 読者ニ対シテ説明ヲ与フルノ目的 (Eisele, Zur Diagnostik der Interpolationen in den Digesten und im Codex in der Zeitsch. d. Savigny-

Stiftung f. Rechtsg. VII. S. 18)

ユスチニアヌスノ Institutiones 八主トシテ法学教習上ノ便宜ノ為メニ編纂サレタル小法典ナリ Digesta 八帝当時ノ法ヲ蒐集スルヲ以テ編纂ノ主眼ト為シタリト雖委員等八傍ラ是ヲモ法学教習ノ用ニ供スヘキノ意ヲ常ニ服膺シテ編纂ニ従事シタリ故ニ往々 id est(即チ) hoc est(即チ)等ノ文詞ヲ初ニ置キ簡單ナル説明文ヲ原法文中ニ挿入シタリ此種ノ説明文ト委員ニ非サル人ノ加ヘタル謂ハコル glossemata ト區別スルハ甚タ困難ナリ今委員ノ加ヘタル説明文ノ一例ヲ挙ケン

D. 23, 1, 14 ニ Modestinus ノ differentiae 第四卷ヨリ採録サレタル法文ニ曰ク

婚姻ノ予約 (sponsalia) ヲ締結スルニ当リテハ婚姻ノ場合ノ如クニ契約者ノ年齢ニ就テ一定ノ規則ナシ故ニ当事者双方カ行為ノ何タルヲ了解スルコトヲ条件トシテ即チ七年未滿ノ幼者タラサルコトヲ条件トシテ (id est, si non sint minores quam septem annis) 若年ノ時ニ於テモ有効ナル婚姻ノ予約ヲ締結スルコトヲ得

右ノ法文中ノ「即チ」以下ノ説明ノ文詞ハ其意義ニ於テハ明白ナリト雖本文ノ何レノ点ヲ直接ニ説明シタルモノナルカハ原文章上精確ヲ欠クノミナラス quam ナル語ノ後ニ ablativus ニ用ヒラレタル名詞 (annis) ヲ置キタルハ全ク schulmaessig ノ Solöcismus ニシテ吾人ハ紀元後四百二十六年ノ引用法 (Citiergesetz) ニモ特筆サレタル Modestinus 其人ニ其責ヲ歸スルヲ躊躇セサルヲ得ス (Lenel, O. cit. I, p. 705. N. 12 N. 2)

(二) Codex Vetus 制定ノ後ニ発シタル勅令ヲ編入スルノ目的

ユスチニアヌスノ立法事業ハ Codex Gregorianus, Codex Hermogenianus 及ヒ Codex Theodosianus ニ編纂サレタル勅令及ヒ其後ノ勅令中効力ナキモノ及ヒ重複ノモノヲ去リ且ツ内容ノ調和ヲ図リテ新ラシキ勅令彙纂ヲ制定スルニ在リタリ是ハ紀元後五百二十八年二月十三日ノ勅令ヲ以テ Tribonianus 外十名ノ委員ニ命セラレタリ五百二十九年四月七日ヲ以テ Codex Iustinianus ノ名称ノ下ニ勅令彙纂公布サレ同年同月十六日ヨリ施行サル而シテ Digesta ノ編纂ノ勅旨出テタルハ五百三十年十二月十

五日ナリ Codex Iustinianus 制定後ヨリ委員カ Digesta ノ編纂ニ着手シタル間ニ帝ハ新勅令ヲ発シタリ是等ノ勅令ヲ帝ハ委員ニ命シテ法学者ノ口ヲ借りテ Digesta 中ニ編入セシメタリ当時帝ハ Codex Iustinianus repetitae praelectionis (修正勅令彙纂)ヲ編纂スルノ意ナカリシヲ以テナリ此ノ如キ新勅令ノ挿入ノ顯著ナル例ハ D. 19, 2, 25 ナリトス此法文ハ Gaius ノ地方告示註解書ノ第十卷ヨリ採録サレタルノ外觀ヲ装フ然レトモ該法文カ委員ノ挿入ナルコトハ C. 4, 38, 15 ノ法文トノ比較上明白ナリ

(ホ) 修辭ノ目的

委員ハ其趣好ニ從フテ法学者ノ用ヒタル字句ヲ変更シタリ此目的ヨリ出テタル変更若クハ挿入ハ實質上何等ノ意義ヲ有セサルモノ多シ例之 dubitamus ヲ dubitabitur (D. 9, 25, pr.) ニ改メタルカ如シ( 此種ニ屬スル emblemata ノ例ハ Krueger, Geschichte der P. u. L. d. röm. R. S. 332. Anmk. 44 )

<sup>10</sup>  
(1500)

Digesta ノ法文中何レノ文詞若クハ全文カ謂ハユル挿入変更ナルカヲ確定スルハ単ニ文詞ヲ玩弄スルニ過キスト為スハ大ナル謬見ナリ interpolationes ノ発見ニ因リテ羅馬法ノ變遷ヲ明ラカニシ又一見互ニ牴觸スト見ユル法文ノ調和解釈ヲ正当ニ為シ能ハシムルノ実益アリ故ニ正当ノ方法ニ依リ又羅匈語羅馬法ノ歴史及ヒ理論ニ通シタル眼光ヲ以テ Digesta 法文中ニ於ケル Tribonianismen ヲ発見スルハ興味ト実益トヲ兼ネタル羅馬法研究ノ一面ナリトス此方面ノ羅馬法研究ハ Antoiue Favre (1557–1624) 氏カ正鵠ヲ失シタル多数ノ発見ヲ為シタリシ以來中絶ノ姿ヲ呈シタリシカ近世独逸ノ Eisele, Lenel, Gradenwitz ノ士適當ナル方法ニ依リ精銳ナル利器ヲ以テ再ヒ發掘ニ從事シ大ナル功績ヲ羅馬法学上ニ擧ケタルハ吾人羅馬法ニ志サス者ノ正サニ彼等ニ向ツテ感謝スヘキコトナリトス若夫レ是等ノ士カ如何ナル方法ニ依リテ発見ニ從事シタルカ又發掘ノ範圍ヲ Codex ニモ進メタルノ狀況ハ他日之ヲ調査センコトヲ期ス。

<sup>11</sup>  
(1501)

(「京都法学会雑誌」第3巻第11号)

Digesta 中ニ於ケル emblemata Triboniani

著 者 春木一郎

発行日 平成 13 年 4 月 8 日 1.0 版

平成 14 年 7 月 8 日 1.1 版

平成 15 年 10 月 22 日 1.11 版

発行者 和田 徹

発行所 和田電子出版

底本 「京都法学会雑誌」第 3 巻第 11 号

京都法学会 明治 41 年 11 月

## [ 作成備忘録 ]

- ・底本は縦書き、旧字体表記、仮名躰字あり。
- ・底本著者名「教授 法学博士 春木一郎」。
- ・論文末尾「(完)」省略。
- ・「子」 - > 「ネ」とした。
- ・欄外に底本の頁を付記。

頁	行	底本	本書
1	13	ἑμβλημα	ἑμβλημα
3	5	traditis	traditio
5	1	Rechtsq.	Rechtsg.
6	1	纂編	編纂